

ウガリト語研究 (3)

—ケレト叙事詩のプロローグについて—*

津村俊夫

ウガリト出土の叙事詩のうちで、「ケレト叙事詩」は、もう一つの叙事詩である「ダニエルとアクハトの物語」に比べて、破損部も少なく全体の話のスジがより明瞭である。にもかかわらず、物語の理解にとって要とも言うべきプロローグの部分の解釈において、前者は、後者よりも多くの未解決の問題を提出している。

両叙事詩には、世継ぎのいない王が夢の中で神エルから約束を受けて、その結果として男児を授かるという共通のテーマが見られる。しかし、何故彼らに「子がいない」のか、その原因に関して、両者には大きな相違点が存在する。「アクハト叙事詩」の場合、ダニエルに「子がいない」のは妻の不妊の故であったようである。KTU 1.17/2 Aqht I: 18-19によれば、彼の妻はまだ生存していたが、「彼には彼の兄弟たちのように子どもがいなかった」のである。他方、「ケレト叙事詩」の場合は、彼に「子がいない」理由は、別の要因による。その要因の説明は、従来二つの立場が激しく対立していて、未だ定着していない。それらを要約すれば次のようになる。

〔A〕ケレトの正妻が「いなくなった」後に彼の全ての子供が死んでしまったため。

〔B〕ケレトが妻によって子を得る前に、彼の七人の妻が次々と死んでしまったため。

前者の立場に立つ学者には、H. L. Ginsberg (1946), C. H. Gordon (1949), (1977), G. R. Driver (1956), (1965), J. Gray (1964), (1965), F. C. Fensham (1971), M. Dietrich-O. Loretz (1973), (1980), A. Herdner (1974), M. D. Coogan (1978), D. Kinet (1981) 等がいる¹⁾。後者に立つ者としては、U. Cassuto (1950), A. van Selms (1954), (1979), J. Aistleitner (1964), H. Sauren-G. Kestemont (1971), B. Margalit (1976), J. C. L. Gibson (1978), J. C. de Moor (1979), P. C. Craigie (1983) 等がいる²⁾。

いずれの理由でケレトに「世継ぎ」がないのか、それに対して明確な答を提出することが、現在、ケレト叙事詩研究にとっての最重要事である。

本稿において、もう一度、プロローグ全体を文献学的・言語学的に検討し、あわせてその文学的構造に注目することによって、この難問に対する解決の糸口を見出したいと願っている。

*	*	*
〔テキスト〕 <u>KTU 1.14: I/UT Krt: 1-25</u>		
(1) [lk] rt	(1) Krt について	
(2) [] .mlk[]	(2) ……王……	
(3) [] m.k[]	(3) ……………	
(4) []	(4) ……………	
(5) [] m.il []	(5) ……エル…	
(6) [] dnhr.	(6) ……川の…	
(6~7) umt/[krt.] ^c (?)rwt.	(6~7) Krt の一族が滅んだ、	
(7~8) bt/[m]lk.itb!d!(itdb).	(7~8) その王家が断絶した。	
(8~9) dšb ^c /[a]hm.lh	(8~9) そこには7人兄弟、	
(9) tmnt.bn um	(9) 8人のはらからがいた。	
(10) krt.ḥtkn.rš	(10) Krt は、自分の子孫が絶えた、	
(11) krt.grdš.mknt	(11) Krt は王朝を滅ぼされた。	
(12) aṭt.šdqh.lypq	(12) 正しい妻を彼は失なった、	
(13) mtrḥt.yšrh	(13) そのふさわしい配偶者を、	
(14) aṭt.trḥ.wtb ^c t	(14) 彼が娶った妻がいなくなった。	
(15) tar um.tkn lh	(15) 同じ母の子らが彼にいた。	
(16) mṭlṭt.kṭrm.tmt	(16) 三分の一は出生時に死んだ、	
(17) mrb ^c t.zblnm	(17) 四分の一は病いで。	
(18~19) mḥmšt.yitisp/ršp[.]	(18~19) 五分の一は、神ラシュブが自分のところに引き寄せてしまった、	
(19~20) mṭdṭt.ḡlm/ym.	(19~20) 六分の一は、神ヤムの若者が。	
(20~21) mšb ^c t hn.bšlh/ṭtpl.	(20~21) 七分の一は、見よ！剣に倒れた。	
(21~22) y ^c n.ḥtkh/krt.	(21~22) Krt は見る、自分の子孫が、	

- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| (22) <i>y^cn.ḥtkh rš</i> | (22) 彼は見る, 自分の子孫が絶えたことを, |
| (23) <i>mid.grdš.tbth</i> | (23) 自分が王家を全く滅ぼされたことを。 |
| (24) <i>wbklhn.šph.yitbd</i> | (24) まことに, 家族がすべて絶滅した, |
| (25) <i>wb.phyrh.yrt</i> | (25) まことに, 世継ぎが完全に。 |

* * *

< 1 行 >

[*ḥk*]*rt* は, /la-kirta/ (または /la-kirita/) と音読できる。属格形を /kirta/ とするのは *lbe^cl/la-ba'la/* (cf. Gordon, *UT*, §8.14) やアッカド語の人名 *'iarimanu* の属格形 *'iarimana* (RS 17.149: 8, cf. *Ug. V. text 6*) や, *'uzzinu* (*PRU* III, p. 260) の属格形 *'uzzina* (RS 17.36: 9, cf. *Ug. V. text 7*) 等の場合と同じく, この人名 *Krt* が diptotic (二格変化) の名詞であると判断できるからであって, Albright, *YGC*, p. 118, no. 19 が提案するところの, ミタンニ王国の父祖の名前 *Kirta* とは区別されるべきである。(言語学的には, Albright が基づいている *Alalakh* 文書中の *mār Ki-ir-ta* も, **Kirtu* の属格形と見做しうる。) なお, 北シリアの *Ḥabur* 川畔の町 *Ḥabur* を中心とする地域が, ケレト王の治めた場所であるという仮説 (M. C. Astour, *UF* 5, 1973, 29-39; K. A. Kitchen, *UF* 9, 1977, 142) に注目せよ。

伝統的な「ケレト」*Keret* という呼び方は, **qitl-* タイプの名詞のヘブル語的読みであるが, ウガリト語では *segolization* が未発達であったと考えられるので, /*kéret*/ は「最もありそうにない」読みである³⁾。最近明らかにされてきている前3000年期のエブラ語の *malik-*「王」や神名 *sipiš* などから判断すれば, 前2000年期のウガリト語の *Krt* は, **kirt-*→*kirit* の変化 (epenthesis)⁴⁾ を経ていると考えることができるかもしれない。なお, de Moor-Spronk (1982) は, 最新の論文で, /*kirtu*/ と発音している⁵⁾。その他, アッカド語の人名 *Kuritu(m)* などに基づいて「クリト」(松田), *Kuritu* (Weippert)⁶⁾ と読む立場や, Gordon のように *Krt* を *Kret* と読み, クレタ人の父祖と結びつける立場 (*PLMU*, p. 34) もある。

< 6 行 >

「川」(*nhr*) は, 破壊的な力としてケレト家の滅亡に一役買った神か。cf. 「海」(*ym*)//「川」(*nhr*) (KTU 1.2: IV/UT 68: 12-13, 19-20 他。cf. ハバクク書 3:

8)⁷⁾。ここでの *nhr* は後出の *ym* (20), *isp* (19) とともに、ケレトの子息たちを絶滅させた神々の一人と考えられるのではないか。

<6~8行>

umt (一族) // *bt* (家) は、民数記25:15 אֲמוֹת בֵּית-אָבָם と比較せよ。ヘブル語形は複数 (אֲמוֹת) だけであるが、ウガリト語 *umt* は、単数・複数 (女性形) の両方の可能性を持っている。なお、アッカド語 *ummatum* に関する詳しい最近の研究 (A. Malamat, *UF* 11, 1979, 527-536) を参照。Gordon は、*umt* を *UMC* (1966) では “mothers” と訳出していたが、*PLMU* (1977) で “clan” と変更している。ここでの *bt* は、単に建造物としての宮殿 “palace” (Driver, Gray, Rummel⁸⁾) のことではなく、「いえ」、*bitu*⁹⁾ (アッカド語) の場合のように「家族、(王)家」などを意味することが、*umt* との並行関係から明らか。この“お家断絶”については後に詳述する。

[*krt*]. ^o(?)*rw*t という読みは *KTU* に従う。詳しくは、Dietrich-Loretz (1973), 33; Badre *et al.* (1976), 96; Olmo Lete (1981), 289¹⁰⁾; de Moor-Spronk (1982), 154 を参照。^o*rw*t はヘブル語 עָרָה (to be naked, bare), עֲרִוּהָ (nakedness) と同じ語根 *^oRW/^oRY にもとづく語である。de Moor-Spronk は ^o*rw*t を G. fem. pass. pat. pl. ^o*ryt* (*KTU* 2.38/UT 2059: 25)¹¹⁾ の変種と考えるが、^o*rw*t // *itbd* という動詞形 *itbd* との並行関係から判断して、^o*rw*t は *atwt* / 'atawat / “she came” (*UT*, §9.51) のように G. qtl. 3. f. sg. と分析する方が適切である¹²⁾。上述のように *umt* は f. sg. であり得るので単数形の動詞 ^o*rw*t の主語と考えられる。なお、Gordon, *PLMU* (1977); Gibson, *CML*² (1978) は従来の読み *rpat* によって、それぞれ “[had lost] vigor”, “did die out” と訳しているが、後者はその *Addenda* (p. 165) で *KTU* の ^o*rw*t に注目している。

itdb は、/d/ と /b/ の音位転換 (metathesis) の結果であって、語根 *BD (滅びる) にもとづく動詞形 *itbd* を意図している。松田, p. 110 及び A. Herdner, *TO*, 503, no. d は、この語を、*yitbd* (24), impf. に対する pf. (qtl) 形と説明する。さらに A. Herdner は、8, 10, 11行の動詞全てが pf. であるのに対し、24行の *yitbd* が impf. として対比されていると考える。しかし、*itbd* をアラビア語の *Ifta'ala*, pf. に対応する唯一のウガリト語例と考えるよりも、*yitbd* (24) の変種 (variation) と考えることができる。すなわち、

yitbd /yi'tabid-/ ~ *itbd* /'itabid-/ < *'i'tabid-¹³⁾

なお、語頭の /' / と /y / の互換現象の他の例としては、*yhd* (*KTU* 1.14: II: 43/ *UT Krt*: 96) // *ahd* (IV: 21/184) がケレト叙事詩中に見られる¹⁴⁾。もう一つの可

能な説明として、文字表記上の特殊例として *itbd* をとらえる方法があるのではないだろうか。すなわち、*bt mlk.itbd* は、音声変化、

* /bētu malki yi'tabidu/ →

/bētu malkiyi'tabidu/ → /bētu malki i'tabidu/

の結果を文字表記したものと考えられる。この場合、語分割符号〈〉は、文字素群〈mlk〉の次に自動的に（慣習に従って）付されたと説明できるだろう。従って、*itbd* の場合、形態素 /yi-/ の一部が脱落したというよりも、 $i+y \rightarrow i$ という、前の語の語末母音と後続する語の語頭子音との間の連声 (sandhi) が生じたといえるのではないだろうか¹⁵⁾。

< 8 ~ 9 行 >

Gordon, Driver, Pardee, Badre *et al.* Coogan 等は、*d* の先行詞を *mlk* ととり、Krt 王に 7 ~ 8 人の兄弟がいたと考えるが、他方 Ginsberg, Gray, Gibson¹⁶⁾ 等は、*d...lh* が *bt mlk* 全体にかかると考える。後者の場合、*ahm//bn um* は必ずしも王自身の兄弟とはならない。ここでの *ah* は、ヘブル語 אָהָב のように、「家族の中の男性成員」¹⁷⁾ という、広義に解することができるのではないだろうか。従って、彼らを「一人の妻によるケレトの息子たち」¹⁸⁾ ととることが出来る。*bn um* は、文字通りには「同じ母から生れた子たち」を意味し、ここでは松田 (p. 110) と共に「はらから」と訳す。(8) ~ (9) の二行詩の大意は、それゆえ、「ケレト王家には、7人兄弟の息子たちがいた」ということになる。なお、*ah//bn um*, *šb'//tmm(t)* という対語は、ヘブル語にも共通に見られるものである。cf. *RSP* I (1972), II 17, II 531. 「並行対語」 (parallel word pairs) の言語学的説明は、最近の A. Berlin, *UF* 15 (1983), 7-16 を参照のこと。

< 10 ~ 11 行 >

10行の *krt* は、いわゆる *casus pendens* で、題目化 (topicalization) により、ケレト王自身に注意が向けられる。すなわち、ケレトの「一族」//「王家」の滅亡とは、結局のところ、ケレト王自身に関わる事柄であることが再確認されている。

hik は、「父」(hâtik-) または「子」(hatk-) のいずれかを意味しうる (Gordon, *UT*, §19.911; Pardee, *BO* 37, 284f.) 最近、J. Healey は、*UF* 12 (1980), 408f. で、*hik* を /hâtik-/ と読み、「the one who cares for, i.e. father and son」と説明している。(21) と (22) で、*hik* が再び用いられていることから判断して、ここでも *hik* を「子」又は「子孫」ととる方がよい。(21 ~ 22行の *hik* は、それに付随している人称代名詞がケレトを意味するから、「父」ではありえない。) 従って、*hikn*

の接尾辞 *-n* は, 1c pl. ととりよりも 3m sg と考え, *casus pendens* である Krt を受ける *resumptive pronoun* と判断するのが最もよい。しかし Gibson は, *huk* を「父」, *-n* を「我らの」と解釈し, 「我らの父, Krt」と同格ととる。そして「我らの」が物語の語り手と聴衆を指すと考える¹⁹⁾。しかしながら, このように想定しなければならない積極的な理由は文脈から見出しえない。cf. Pardee, *BO* 37, 284-5. なお, 接尾辞 *-n* を人称代名詞ではなく, *huk/hukn* を名詞の doublet と考える立場もあり, 最近では, A. Herdner *TO*, p. 504, no. e; Dietrich-Loretz (1973) 等がある。*huk* に関しては, その他に “authority” (de Moor-Spronk), “Herrschaftsbereich” (Dietrich-Loretz), “government, rule” (Fensham) と訳す立場があるが, 直前の文脈 (6) ~ (9) が 7 人の息子たちのいたケレト家の滅亡のことについて述べているので, *huk* は「子」「子孫」という通常の具体的意味をもつと考える方がよいと思われる。

rš//grdš の並行対語は, 再び 22~23 行に表われる。この対語は, 意味的に *rwf//itbd* (7~8) に対応していると de Moor-Spronk, *UF* 14(1982), p. 154 が考えるのは妥当である。*rš* も *grdš* も共に, 滅亡・絶滅を意味する語であることは, 文脈からも支持される。*rš* は *RŠ 「貧しい」 (cf. Delekat, *UF* 4, 1972, 11) によって説明するよりも, むしろ *RŠŠ 「滅ぼす, 破壊する」 (cf. Dietrich-Loretz, 1973, 33; Driver, *CML*, 155; de Moor-Spronk, 154, no. 13) の stative または pass. part. と考えられる。他方 *grdš* は従来, シリア語の *gardeš* “to be gnawed off” (<*GRD), Ethpael, “to be broken” (Gray, Delekat, 他) によって説明されて来た。しかし, *grdš* を動詞又は stative, participle, adjective の述語的用法と考えることには, 統語論的難点がある。すなわち, 主語であるはずの *mknt* (および 23 行の *ibt*) が女性名詞であるため, *grdš* は vb, part 等の述語の女性形ではありえないのである。Dietrich-Loretz (1973), p. 33 は, アッカド語の “stative” を引き合いに出して, *grdš* が stative で女性・複数形の名詞 *mknt* を主語としてとり得ると主張する。最近になって, de Moor-Spronk, 155 は, *grdš* をヘブル語 שִׁדְדָה “tumulus, ruin” のように *GDŠ にもとづく名詞 (“ruin”)²⁰⁾ であると考え, その形態を,

*gadisu > *gaddišu > *gardišu

という子音異化の現象の結果生じたものと説明した。そして *grdš* を主語 *mknt* に対する補語ととり, “Kirtu—(his) dwelling-place was a ruin” (p. 154) を訳出している。この名詞説では, 主語・述語の一致 (agreement) の問題は解決されるが, その結果として, de Moor-Spronk は 23 行の *mid* を *rš* の直後に置くことを

余儀なくされるようになって、21~23行の三行詩の分析に不安定要素を来たしている²¹⁾、それゆえ、我々はここに *grđš* を形容詞の構成形 (construct) と見做す仮説を提案したい。すなわち、*grđš* は、〈qattil-〉タイプの形容詞 *gaddiš-「滅んだ」から音声変化〔異化〕: *gaddiš->gardiš- をした結果生じた形態 (男性、単数形) で、後続する名詞 (*mknt*; 23行の場合は *ibth*) と construct chain を構成している。従って、*Krt* (11) が *grđš.mknt* (形容詞句) の主語と見做され、主語・述語の一致問題もうまく説明できる。Gordon, *PLMU*, 37 は、11行を “Kret is despoiled of a place” と訳し、同様の統語的理解をしているように思われる。この理解によれば、11行目の *Krt* は多くの学者 (e.g. de Moor-Spronk, Herdner, Fensham, Dietrich-Loretz. cf. Pardee, *BO* 37, 285) が考えるような *casus pendens* ではなく、主語そのものである。

最近、Margalit, *UF* 11 (1979), p. 542, no. 19 は、*grđš* を *BD の類義語と考える従来の解決方法に疑義を表明し、*grđš* を *htk* と並行関係にある名詞と考え、共に「切る」という意味の語根から派生した語と説明がしている。その根拠は、ケレトが彼の不動産・財産を何も失っていないという事実にある。しかし、彼の説明は、*mknt* や *ibt* を「家・不動産」という具体的 (物理的) な意味だけに限定して理解していることを示しているが、果してそれでよいのだろうか。たしかに、*mknt* は、「居城」(松田)、「家」(柴山)²²⁾、“dwelling-place” (de Moor-Spronk)、“(sa) demeure” (A. Herdner)、“die Statte” (Dietrich-Loretz)、“Wohnstätte” (Aistleitner²³⁾)、“(his kingly) estate” (Gibson)、“place” (Gordon) 等と訳されている。しかし、後の叙事詩本文から明らかであるように、ケレト王が自分の家・不動産を失ってしまったという事実はない。そのことは、彼が、金銀ではなく自分の家にないもの (*d.in.bbty*)、すなわち世継ぎを生む「妻となるべき *Hry*」を *Pbl* 王に要求し続けていることから明らかである。cf. *KTU* 1.14: III: 33ff/*Krt*: 137ff. この点からも、ケレト叙事詩と旧約聖書のヨブ記のモチーフをパラレルなものとして比較する²⁴⁾ことは避けるべきである。王にとって「子孫が絶える」(*htk.rš*) ことは、すなわち「王家の断絶」であり「王朝の終焉」であるから²⁵⁾、ここでの *mknt* も、「王朝」“dynasty” (Coogan)、“establishment” (Gray, Driver, Stuart)、等のような抽象的な訳語の方が適切であろう。

<12~15行>

att.šdqh//mtrh.yšrh (i.e. *att//mtrh, šdq//yšr*) という並行関係については、ほとんど見解の相違はないが、*šdq//yšr* の正確な意味については、未だ決着がついていないようである²⁶⁾。Gordon, *PLMU*, pp. 35, 及び 37, no. 34 は、ここでの *šdq//yšr*

が、王家の世継ぎを産むべく「運命づけられた」‘destined’ 妻のことを描写する語であると説明する。(彼は、*šdq* を “right”, *yšr* を “proper” と訳し、共に “wife”//“bride” を修飾する形容辞と解している。) ケレトの妻は、単に「正妻」“legitimate wife” (Gray, *LC*², p. 132, no. 6); “der Hauptfrau” (Aistleitner, *MKT*, p. 89, no. a) であるということよりも、アブラハムに対するサラのように、神の計画によって定められた (‘destined’) 妻であると、Gordon は主張するのである²⁷⁾。この立場を継承する Badre, *et al.* 98 は、*šdq* を特に “promise” (Fr.) と訳出している。これら、*šdq*//*yšr* を妻の描写と考える従来の立場に対して、最近、de Moor-Spronk, 155 は、*šdq* (=アッカド語 *kittu*) と *yšr/mšr* (=アッカド語 *išaru/mišaru*) が、「正しい」‘righteous’ 王たちの資質 (qualifications) であることから、*šdqh*//*yšrh* をケレト王自身の「正しさ」を表わす表現と考えている。そして、“A wife (befitting) his righteousness”//“a spouse (befitting) his fairness” と訳出するのである。たしかに、文法的には *att.šdqh* は (1) “the wife of his righteousness”, (2) “his righteous wife” (cf. *הַר קְדוֹשׁוֹ* “his holy mountain” <lit. “the mountain of his holiness”) のいずれの訳も可能である。しかし、直前の文脈で、ケレト家に7人の息子たちがいたが、一族が減び子孫が絶えたことへの言及があることから、*att.šdqh* は、後の Hry のように (cf. KTU I.15/UT 128: II: 23) 「7人の子供の母^{27a)}」という祝福された立場を授けられるに「ふさわしい」(*šdq*//*yšr*) 妻のことを意味しているのではないかと思われる。本テキストは、このような「正しい//ふさわしい」妻——すでに「7人の息子たち」をケレト家に産んでいた母 (*um*; cf. *bn um* (9), *šar um* (15))——を、ケレトが *lybq* したと述べているのである。

lybq の意味に関しては、従来、*PWQ “to get, find” (Gordon, Ginsberg, de Moor-Spronk, 他) か、*YQP “to send away, remove” (Krahmalkov); “bekommen, erhalten, erwerben” (Loretz); “obtain” (Margalit) や *NPQ “go out” (Dietrich-Loretz) 等の解釈が与えられて来た。さらに、*l* について二つの説明、すなわち、①否定詞 “not”, ②強調詞 “indeed, verily”, が可能であることから、*lybq* 全体の理解が困難になっている。ここでもう一度、12~15行の詩的構造に注目してその文脈の中で *lybq* の意味を捉える努力をしたいと思う。

従来、12~15行の並行法の区分には二つの相反する立場がある。

(i) 12行//13行, 14行//15行

(ii) 12行//13行//14行

(i) の立場は、12~15行に二つの二行詩を認める考え方で、この分析を採用す

る最近の学者はほとんど例外なく、ここには「7人の妻」の最初の二人への言及がなされていると言う³²⁾。彼らは16行の *mltt* が「三番目の妻」を意味すると考えるために、その直前の文脈に二人の妻の存在を認めるべきであると主張するのである。これらの学者間で、Cassuto や de Moor²⁹⁾ のように *att.sdqh* (12) を最初の妻、*att.trh* (14) を二番目の妻と考える立場と、Sauren-Kestemont, Margalit³⁰⁾, Gibson 等のように、*att.trh* (14) を最初の妻と考え、15行に二番目の妻への言及があるとして、*tar um.* (15) を読み換える立場とが存在する；cf. *tnt um.* (Sauren-Kestemont), <a/m>*tt*[.] *rumt*[.] (Margalit), *tnt.um.* (Gibson³¹⁾). de Moor 等の立場では、何故、最初の二人の妻だけに詳しい記述が与えられている、彼らに比べて七番目の妻が余り強調されていないのかが説明されていない。他方、Gibson 等の解釈では、(12)~(13)は如何なる働らきをしているのか。Pardee, *BO* 37, p. 285 が指摘しているように、現在ケレトが妻を必要としているということの説明としては、“(One to be) his lawful wife he had not found,” (12) と “He did take a wife” (14) とは互いに矛盾しているのではないだろうか。「7人の妻」への言及を想定するこれらの学者は、テキストの読みにおいて主観的判断を来しているようで、お互いの間に意見の一致が見られない。最近の、de Moor, *UF* 11, 644 による本文修正 (追加) : *tar um* <l> *tkn* は、その統語的難点とともに³²⁾、正当化されるに足る根拠がない。我々は、*editio princeps* 及び代表的テキスト集 *CTA*, *KTU*, *TO* に従って、15行の冒頭の読みを *tar um.* として、釈義的努力を押しすすめて行きたいと思う。以上 12~15 行を二つの二行詩に分けるという考え方(i)は、「7人の妻」の死を本テキストのモチーフとする立場の学者によって主として主張され、その主題に合致すべく、本文がしばしば変更されていることが明らかとなった。最近、de Moor-Spronk, *UF* 14, p. 155, no. 20 は、彼らのいうところの“external parallelism”の原理に即して本文を解釈すべきであると主張し、並行法の構造をもつ12~13行の前後の脈絡がすべて“bicola” (二行詩) を構成していると考えた。しかし、そのように考えて、14~15行を二行詩と分析すべきであると主張する根拠は薄い。たとえば、*mšb't hn. bšlh' ttpl* (20-21) は、一行詩 (monocolon)³³⁾ と見做すことができるし、その次の21~23行は、三行詩と分析するのが妥当であるからである³⁴⁾。

(ii)の立場は、12~14行を三行詩ととる考え方で、従って、15行が一行詩を構成すると考える。Gordon, Dietrich-Loretz, Olmo Lete 等はこの立場をとり、15行をケレトの息子たちについての言及であると考えた。Dietrich-Loretz, *UF* 12 (1980), pp. 200f. は、初期の立場 (*AOAT* 18, 1973) を変更して、12~14行を三

行詩, (12)/(13)/(14), と分析し, そこに次のような三組の語の並行関係を認める。すなわち, *att//mtrht//att, šdq//yšr, *pwq//trh*。この場合, 三行は, *abc//a'b'//a"c"d* と分析され, **pwq* (c) の意味は, *trh* (c") と関連づけられることになる。しかしながら, 三行目の *att.trh* (14) 全体を C. Krahmalkov *JNES* 30 (1971), p. 142 とともに, <awat iqbu> タイプの表現と考え “the wife (whom) he married” と訳すことができるのではないだろうか³⁵⁾。この場合, 三つの並行関係は, *att//mtrht//att.trh, šdq//yšr, lypq//wtb't* となり, 三行が 3:2:3 の韻律と *abc//a'b'//A"c'* というより安定した構造を持つことになる³⁶⁾。すなわち, 三行目の *att.trh* (A") は *mtrht* (a') の言い換えで全く同義であり³⁷⁾, 従って, *lypq* (c) は *wtb't* “indeed she departed” (c") に意味的に対応していると思ふことができる。最新の情報 (RS 24.247: 6, 47)³⁸⁾ によれば, *lypq* が類似した文脈:

mlkn. lypq [šp]h 「我々の王は家族 (子孫) を持っていない」

に現われることから, 本ケレト叙事詩の場合も, *lypq* を **PWQ* “to get” より「持っていない」→「失なった」と理解し, *wtb't* 「いなくなった」³⁹⁾ と同義であると考えるのが適切であろう。ここでは, *w* を強調的または冗言法的助辞ととり, *l* を否定詞と考える。それゆえ, *ypq* (A) の否定形と *tb'* (B) の肯定形が同義的に対応する <A, not B> パターン——ここでは not A/B——をとっていると説明できる⁴⁰⁾。さらに, この三行詩 (12~14) は, 一行目と三行目が同義的に対応しているだけでなく, 真中の二行目 (*mtrht.yšrh*) は, *šdq//yšr* によって一行目と関係し, *mtrht//att.trh* において三行目と密接に関わっていると考えられる⁴¹⁾。以上の諸点から判断して, 我々は12~14行を三行詩と分析し, 15行がそれ自体で一行詩を構成すると思いたいと思う。

tar は従来, ヘブル語の $\text{שר} \text{šr}$ “flesh” 等との関係で説明されてきたが⁴²⁾, RS 22.225: 3-5 における *šir* がヘブル語 $\text{שר} \text{šr}$ に明らかに対応するために, *tar* と $\text{שר} \text{šr}$ の関係付けが根拠の薄いものになって来ている。しかし, Sanmartin, *UF* 3 (1971), p. 179, no. 33 は, ここに š と š の変種 (Variation) を想定し, *šir* の背後にセム語祖語の語根形態素 **šr* を想定する。Dietrich-Loretz, *UF* 12 (1980), p. 202 は, *šir* と *tar* の違いに注目しながら, *tar um* が「子供, 子孫」を表現する “eine hochpoetische Wendung” であると説明する。一方, Herdner は, **šr* が音位転換によって **šr* から変化したと考え, *tar* を “postérité” と訳出している。しかし, いずれの場合もこれらの最近の説明は, 従来どおり, ケレトの「子, 子孫」を意味するものとして *tar* を理解している。しかし *tar um* を「子孫」ではなく「(ケレトの)妻」と考える Fensham の立場⁴³⁾もある。最近,

de Moor-Spronk, *UF* 14, p. 156 は, *tar* を動詞ととる提案を行って, *t'r "to arrange" にもとづいて, *tar um* を "he procured a mother" と訳している。これは、彼らの並行法のとらえ方 (すなわち, (14)/(15) という二行詩から, *trh//tar* という動詞——共に pf. 3 m sg. ——の並行関係をみる) から来ているが, もし *tar* を動詞と認めるなら, 本叙事詩のプロローグ中でここだけが——21~22行の *ʔn* を除いて——動詞が冒頭にくる詩行となる。その上, 彼らのテキスト修正 <l>*tkn lh* は, その解釈をさらに主観的なものにしてている。

tkn は, *UT* の *akn* でなく, *CTA*, *KTU* の読みに従う。Stuart は, <a> ~~ba~~ を <tt> ~~ba~~ ととらえ, /ta'ru 'ummuti takinu lahu/ と読む⁴⁴⁾。しかし本稿では, *tar um* と *bn um* が, ともにケレトの息子たちのことを意味すると考えられるので, *um* 「母」と読む立場に従う。*tkn* には, *KWN "to be" の他, *KWN "to be royal" (de Moor-Spronk), *KNY "pflegen, hegen" (Dietrich-Loretz), *TKN "to measure out" (Fensham) 等にもとづく諸解釈があるが, 我々はそれを最も通常の話, *KWN "to be" の G. *yql* 3 m pl. と考える。Gray は, *tkn* が形態論的に <qt(1)n> 形の, 3 m pl. でありうることに注目しながらも, 後続する語群, *mltt*, *mr̄b't*… が女性形であるために *tar* をも女性名詞ととり, *tkn* を *yql*. 動詞の女性・単数形と分析する⁴⁵⁾。しかし, *tar* は単数形 *tir* に対応する複数形のコストラクト (cf. *raš* m. pl. cstr. vs. *riš* m. sg.) と考えることができるので, *tkn* は, 3 m pl の <qt(1)n> 形と見做すことが適切である。さらに, 15~25行の <qt(1)n> 形 (i.e. *tmt*, *ttpl*) を全て, 「息子たち」(*tar um*) を主語ととる動詞 *yql*. 3. m. pl. 形と考えることが文脈上可能である。その場合, 後述のごとく, <mqt(1)t> 形の数詞 (女性形) は, 動詞の主語ではなく, 副詞的機能を果している語と解釈するのが最善である。

<16~19行>

mltt, *mr̄b't*, *mhm̄št*, *mt̄d̄tt*, *mšb't* という <mqt(1)t> 形の語の解釈には, 大別して, (i) 分数ととるか, (ii) それ以外に解するかとの二つの立場⁴⁶⁾がある。そのいずれの立場に立つかは, ケレトの息子たちの死をここでのモチーフと考える立場 [A] か, あるいは7人の妻の死をモチーフと考える立場 [B] かに, 大いに関わってくる⁴⁷⁾。(i)の立場 (すなわち分数説) をとる学者は, 例外なく [A] の立場をとり, [B] と考える学者は全て一貫して(ii)の立場に立っている。しかし, [A] を主張するものが全て(i)の立場をとっているわけではないし, (ii)の立場に立つ学者がいつも [B] と考えているわけでもない。

たとえば, Gordonは<mqt(1)t>形を分数ととり, ヘブル語 $\frac{1}{10}$ מֵעֶשֶׂר, מִחֲצִית

「 $\frac{1}{3}$ 」などにもとづいて [mqtl(a)t-] と読んでいる。そして、これらの数詞がケレトの息子たちのことに言及していると考ええる。他方、7人の妻への言及を12~20行に認める者たちは、〈mqtlt〉を、D. fem. ptc. passive 等と分析し、*mltlt*, *mr̄b't*… をそれぞれ序数の “the third, the forth…” と訳出する⁴⁸⁾。

ケレトの子どもたちの死がモチーフと考える [A] の立場に立つ Gray は、〈mqtlt〉形を D. fem. sg. ptc. passive (f. sg. の *lar* に一致する) と分析しつつも、それらをケレトの子たちの年令 (3才で、4才で、……) を示す語と考えた⁴⁹⁾。また、Driver は、*CML*, p. 29 では、当時の大方の権威 (e.g. Albright, Ginsberg, Gordon 等) とともに、分数説⁽ⁱ⁾をとっていたが、1965年に自説をひるがえして⁵⁰⁾、*mltlt* を “three each, each of three” と解釈して、当該テキストが25人 (= 3 + 4 + 5 + 6 + 7) の息子たちの死を扱っていると主張するようになった。さらに、最近、Badre *et al.*, *Syria* 53, pp. 100f. は、〈mqtlt〉を、前置詞 *m*+〈qtl̄t〉と分割し、*mltlt* を “(les enfants) de la troisième” と訳すことによって、ここに7人の妻の息子たちの死が扱われていると考えている。このように、〈mqtlt〉形を分数と考える立場⁽ⁱ⁾に反対する者たちが自動的に [B] 説を唱えているのではないことが明らかである。

de Moor, *UF* 11 (1979), p. 643, no. 25, は、上にみた Driver と Badre *et al.* による分数説反対の立場を引き合いに出して、⁽ⁱ⁾を否定するが、一方、Driver の方は分数説⁽ⁱ⁾を誤解にもとづいて否定しているようである。すなわち、彼は、分数説 ($\frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \frac{1}{5} + \frac{1}{6} + \frac{1}{7}$) では「ケレトは $\frac{489}{118}$ の息子をもつことになる！」と説明しているのであるが、正解は $\frac{489}{118}$ であって ($\frac{489}{118} = \frac{138}{34} \approx 1.09$) 「息子の全体」を意味する文学的表現と理解するべきである⁵¹⁾。

この分数説は、最近 Dietrich-Loretz (1980) によって再び主張されたが、de Moor-Spronk (1982) はそれを再び批判して、ウガリト語に女性形である〈mqtl̄t〉が果して分数として用いられたことがあるのか、その証拠を挙げるように要求している。たしかに、本テキスト以外の〈mqtl̄t〉形と主張されてきた諸例は、それ以外に説明することが可能である。たとえば、KTU 1.14/Krt: 30 の *km̄hm̄št* は *k*+*m̄hm̄št* ではなく、*km*+*hm̄št*³⁴ と分割することができるし、KTU 1.19: II: 33-34/1 Aqht: 82-83 の *km̄/rb̄t. t̄qlm* も、*km*+*rb̄t. t̄qlm* と分けることが可能である。しかも KTU 4.707 (=RS 21.184): 12 (*bt̄qlm. wr̄b̄t*) によれば、*rb̄t* が “ $\frac{1}{4}$ ” を意味し、ヘブル語の רביעיית に対応することが明らか⁵²⁾である。それゆえ、KTU 1.19: II: 33-34 の場合も、行の区切れどおり *km*+*rb̄t. t̄qlm* と分けて、「四分の一シケル銀のように」と訳す方がよい。他方、*km̄hm̄št* (KTU 1.14: 30)

の方は、それと並行関係にある *km. tq̄lm* (KTU 1.14: 29) の場合のように語分割符号 <·> が無いことから、依然として最終的結論が出そうにない。従来、(1) *k+mhm̄st* とわけて、①「五分の一シケル銀のように」(Gordon 他) か、②「五シケル銀のように」(Margalit) に訳すか、(u) *km+h̄m̄st* と分割して「五つのシケル銀のように」(Olmo Lete) と訳すかの提案がなされている。しかし、ここでも *hm̄st* が “ $\frac{1}{5}$ ” を意味しうるから (cf. ヘブル語 חֲמִישִׁית)、(u) のように分割してその上で「五分の一シケル銀のように」と訳すこともできるのではないだろうか。ただし、「シケル銀」//「五分の一シケル銀」という並行関係が、数字の文学的使用における “the emphatic and climactic character” に合わないことから、Olmo Lete⁵⁹⁾ と共に *hm̄st* を基数ととって「五つのシケル銀のように」と訳す立場も退けられない。しかし、いずれにしても *mhm̄st* でなく *hm̄st* をここに認めることが可能である。以上の議論から、従来 <mq̄lt> 形の分数の存在を支持するために引用されてきた上記の二例は、<q̄lt> 形の数詞 (分数又は基数) と分析することができるので本テキストの <mq̄lt> 形の説明には必ずしも役立たないことが明らかになった。

なお Gordon *UT*, 19.2302 が参考として挙げている KTU 4.362: 6/2094: 6 の *mrb̄*[t.] (KTU), *mrb̄*[t(?)] “quart” (Virolleaud, *PRU* 5, 1965, p. 117) は、テキスト破損のため決定的なことは言えない。また KTU 4.751 (RS 66. 29. 96): 8, 9, 10 の *mrb̄* は、「干しいちじく、干しぶどう等を測る単位」で、Gordon は “ $\frac{1}{4}$ ” or “square”? と説明している。de Moor, *UF* 11 (1979), p. 644, no. 26 は、この *mrb̄* “quart” や *m̄šr* “tithe” が女性形ではないので、<mq̄lt> 形と比べて論じることに反対している。しかしながら、最新のテキスト (KTU. 1.98) の editio princeps である *Ug. VII*, pp. 68f において、A. Herdner は RS 24. 229, fragment A の 3 行目の冒頭を、𐤓𐤕𐤍𐤕𐤕𐤍𐤕𐤕𐤍𐤕𐤕𐤍 (すなわち、*m̄l̄lt̄*; KTU の *m̄lt̄* は誤りか) とコピーして、それを <un tiers> と訳している。テキストが破損していてその前後関係が定かではないけれど、ケレト叙事詩の当該テキスト以外に <mq̄lt> 形が存在するという事実は看過できない。

<mq̄lt> 形の *m̄l̄lt̄*, *mrb̄t*, *mhm̄st*, *m̄d̄lt̄* および *m̄šb̄t* について、もう一つ大きな解釈上の難問は、それらが女性形であるという点に関するものである。[B] の立場、すなわち、ケレト叙事詩プロローグのモチーフを 7 人の妻の死と考える立場は、これらの数詞 (又は分詞) が女性形であるために「妻」を意味すると考える。(その結果、すでにみた如く、ある学者たちは、*tar* (15) を *tnt* (女性形) と読み換えたりする)。あるいは、他の学者は、*tar* 「子孫」が抽象名詞で

あるので女性名詞扱いされていると考える。しかし、上述のごとく、*lar* は、**l'r* から派生した男性名詞 **tir* の複数・コンストラクト形と見做すことが妥当であり、動詞 *tkn* が 3 m pl. 形でありうることから、〈mqtl〉形に関して別の説明が必要とされている。

Fensham は、〈mqtl〉形の分数をケレトの子孫を意味すると考える立場をとる学者であるが、その女性形は、ケレトの妻すなわちの彼の子等の母に言及していると説明し、*mlti* を“A third (of her children)”と訳す。しかし、*mlti+t* というような前半が「子孫」を指し後半が「母」を指すという理解は不自然である。

筆者は、〈mqtl〉形を分数の女性形と考える立場に立ちつつも、それが抽象名詞の絶対形の主題化用法 (topicalization) ではないかと思う。さて、ヘブル語で תמישית 「 $\frac{1}{3}$ 」は、形態上は女性単数形であるが、[חֲמִשָּׁתַיִם] (レビ記 5:24) の場合のように、複数扱われるときもあり、また女性形 רביעית 「 $\frac{1}{4}$ 」は、男性名詞 היום, ההין とともに「拘束形式」で用いられるだけでなく、絶対形 (absolute) でも表われる。cf. 「(一日の) 四分の一」(ネヘミヤ 9:3)。従って、*mlti* 等の〈mqtl〉形の分数は、形態上は女性形ではあるが、男性名詞「子孫」*lar(m)* を指示し得るのではないだろうか。しかし、もし〈mqtl〉形を主語と考えると、文法的に gender の不一致、i.e. 女性形(単/複)の主語に、男性形の動詞 *tkn* (3 m pl) が来るという、不自然が生ずる。ここでは、〈mqtl〉形の分数が抽象名詞(女性名詞)として絶対形で用いられ、日本語の場合と同じく、topicalize されていると考えるのが適切であろう。それゆえ、*mlti* 等の語は、英語では “As for a third, (they died …)” の如く、邦訳では「三分の一は、(死んだ)」とするのが最善である。

次に、本テキストにおける数詞〈mqtl〉の用法に関して、de Moor, UF 11, p. 643 は、もしここにケレトの子孫への言及があるという立場では、数字の連続が 1~2 あるいは $1 \sim \frac{1}{2}$ からはじまっていないという事が問題を複雑にする、と批判している。しかしながら、もし我々が考えるように〈mqtl〉が分数であり、それが $\frac{1}{3}$ からはじまっていたならば、 $\frac{1}{3} + \frac{1}{3} + \frac{1}{3} + \frac{1}{3} + \frac{1}{3} + \frac{1}{3} + \frac{1}{3} = \frac{7}{3} \approx 1.59$ となり、その総計は “totality” (1) を表現するには大きすぎる値である。また、もし $\frac{1}{4}$ からはじまる $\frac{1}{4} + \frac{1}{4} + \frac{1}{4} + \frac{1}{4}$ ならば、その総計、 $\frac{3}{4} \approx 0.76$ は「全体」より程遠い数となってしまう。ここにおける数字の連続が、 $\frac{1}{3}$ からはじまっていることには、それゆえ、それなりの深い理由があるのであって、Ginsberg⁵⁴ が言うような「詩人がその分数の総計が “more than unity” となる

ことを知らなかったか気にしなかったかである」という説明は当たらない。 $\frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \frac{1}{16} + \frac{1}{32} = \frac{31}{32} \div 1.09$ という値が厳密には 1 以上であるということよりも、それが詩人が「全体」を文学的に表現するために用い得た最善の数字の連続であったということに注意を向けるべきである。Gordon が例を挙げているように、例えばエジプト人にとっては、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \frac{1}{16} + \frac{1}{32} + \frac{1}{64} (= \frac{63}{64})$ は、「1」と同等であったのである。これらの例に対して現代的な数学的精確さを期待することは間違いである⁵⁵⁾。

古代の詩人が数字を文学的に使用したということは、忘れてはならない側面である。たとえば、ウガリト文学において、ヘブル文学の場合と同じく、 x と $x+1$ (e.g. 3//4, 7//8) という数字の連続は、クライマックスに向う“ascending”(上昇的) 効果を表現するのにしばしば用いられている。しかも、数字の「7」は、完全数として古くから慣用的に文学的技巧の中で使用されてきたのである。

しかしながら、本テキストでは、 $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{4}$ という“descending”(下降的) な数字の使用が行われているという、数学的精確さにもとづく批判を行って、分数説を否定することは適切ではない。ここでは、むしろこれらの数字の連続が $\frac{1}{2}$ で終わっていることに注意を払うべきである。分数の連続の総計によって「全体性」「1」を表現する文学的技巧としては、 $\frac{1}{2} + \frac{1}{8} + \frac{1}{4} \div 1.08$, $\frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} \div 0.99$, という連続よりも、完全数「7」(*šb⁶) を含んでいる $\frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} \div 1.09$ の方がよりすぐれている。本テキストでは、“ $\frac{1}{2}$ ”のところにクライマックスがあることは、*šb⁶ の使用とともに、次にくる表現「見よ！剣で」(*hm. bšlh*) によっても示されている(後述)。

<16行>

ktrm の解釈には、従来、次のような諸提案がなされて来た。

①「健康な時に」cf. シリア語 *kšr* “health.” e.g. “in full vigor” (Gaster), “in health” (Gray; Ginsberg, *ANET*²), “im rüstigen Alter” (Aistleitner, *MKT*), “bei bester Gesundheit” (Dietrich-Loretz), “though healthy” (Gordon, *PLMU*), “(though) in (her) prime” (Gibson), “en pleine santé” (*TO*); ②「誕生の時に」cf. 出生の時の女神 *ktrt*. e.g. “at birth” (Gordon, *UMC*; Ginsberg, *LKK*; van Selms); “in childbirth” (Coogan); cf. アッカド語 *kašāru* “prosperity, success,” e.g. “in childbirth” (lit. “in success”) (de Moor-Spronk)

③ $k + trm$ “while they dine” (Fensham) < **trm* “to eat” 他。

ここでも、解釈の相違は、パラレリズム (16~17行) の分析の仕方に依存し

ている。*ktrm//zblnm*の並行関係は、ごく少数の学者を除いてほとんどの者たちに受けいれられている。*zbl*が「病い」であることから、*ktr*は、その対称的語意として「健康」と考える①の立場で、「健康な時にも病気の時にも(死んだ)」という *merismus* は文脈に合わない。そこで Gordon 等のように「健康であったが」との修正がなされている。しかし、健康であったが事故や災害および外敵によって生命を失なうということについては、18行以下が言及しているので、16行にわざわざ「健康であったが」という表現を認めなくともよいのではないだろうか。*ktr*はむしろ、*zbln*, *ršp*, *glm ym*, *šlh*と同様に、ケレトの子らの死をもたらす契機または手段のことを意味すると考えるのが、16~21行全体の文脈に最も適合している。古代において、死の危険が非常に大きかった「出生時に」死んだという説明が、ここでは最もふさわしい。人生において死をもたらす最初の契機が「出生の時」であるから、ここでリストの最初にそのことが挙げられているのであると言ふべきではないだろうか。したがって、(16)/(17)の二行詩において、子どもの「出生時」(*ktrm*)の死と「出生後」の病死(*zblnm*)のことが、「merismus」的に表現されていると考えることができるだろう。

<18~20行>

ここの二行詩

$$\left\{ \begin{array}{l} mhmšt. yitšp ršp \\ midit. glm ym \end{array} \right.$$

において、「出生時の死」と「出生後の病死」をもたらした究極の行為者 (Agent) としての疫病神 *ršp*(=Nergal)のことが言及されているのは偶然ではない。*glm ym* “darkness of day” (Gaster, Gray) と訳されることもあるが、*ršp* 神とともに「下界の死の世界」と関係のある「海の神」*ym* のことに関わっていると考えの方がよい。Gordon は、かつて *glm ym* を “youths (victims) of the sea” (UMC) と訳し、*glm* をケレトの息子たちのことと解していたが、最近では、“The Lads of Yamm” (PLMU) と訳し、*glm* が海神の同僚のことを意味していると考えている。これは、彼の並行法の理解の修正を意味する。すなわち、UMC では、彼はこの二行詩を OVS//S’C “A sixth are youths (victims) of the sea” と分析していたが、PLMU では、OVS//O’S’ と分析している。パラレリズムの理解としては後者の方がはるかに良い。すなわち、(16)/(17)の並行法と同じく、二行目で動詞 V (*yitšp*) が ellipsis となり、それを補うために S’ (*glm ym*) が S (*ršp*) よりも大きい Ballast Variant になっているのである。なお、海

における嵐 (*gšm. adr* “mighty rain”) による船の難破について、それが “Lord of Killing” (*rb tmtt*)—Gordon はこれを Reshef か Môt のような神の称号と説明する——のしわざであるということが KTU 2.38/UT 2059: 16, 22 の手紙の中で述べられている。*šlm ym* の従来の多くの解釈に関しては、Dietrich-Loretz, *UF* 12, p. 204, no. 66 を参照。

<20~21行>

mšb^c thn の *hn* は、大別して、①-*hn* (接尾辞) と考える立場と、②*hn* “behold!” ととる考え方ががある。それらは更に次のように細分化される。

①接尾辞 -*hn*

(a) 3.m.sg.-*hn* <-*h*(3.m.sg.)+*n*

i) “its” (*tar* m.sg.)

ii) “his” (Keret’s), e.g. Krt’s (seventh wife)—de Moor, *UF* 11, p. 644.

(b) 3.f.pl.-*hn* “their”

i) *tar*.f.pl. 「子孫」 e.g. “one-seventh of them” (Driver; also Ginsberg; TO, etc.)

ii) *młltt* + *młdt* (Finkel)

iii) 「妻たち」 “(the seventh) of them” (Cassuto, Margalit, Gibson, etc.)

②*hn* “behold!”, “indeed”—Albright, de Vaux, Gordon, Gray, Dahood.

①(a) i) と (b) i) は、すでに論じたように、もし *tar* が m.pl.cstr. であるなら、除外される。①(a) ii) と (b) iii) は共に <*młltt*> 形を Keret の妻たちをさすと考える立場である。以上の4つの立場は、何故 *mšb^ct* の場合だけ -*hn* をとるのかを説明することができない。①(b) ii) は 3 f.pl. -*hn* を *młltt*+*mrb^ct*+*młmšt*+*młdt* を指すととり細密な数学的説明を加える⁶⁶⁾。我々は Gordon 等とともに、②の立場をとりたい。その理由を以下に述べる。

助辞 *hn* “behold!” は、しばしば数詞 *šb^c* とともに用いられて、その完全数「7」を強調し読者/聴き手の注意を喚起する働らきをすることがある。たとえば、

whn šb^c bymm (KTU 1.17/2 Aqht: V: 3)

の場合、通常の **whn bšb^c ymm* (cf. *mk bšb^c ymm*) という語順をはなれて、*šb^c* が前置詞 *b* の前にとび出ているのは、おそらく *hn* のゆえであろう⁶⁷⁾。しかし、本テキストでは、*hn* は **šb^c* を含む数詞 *mšb^ct* の直前ではなく直後に来ている。そのために、*hn* を “behold!” ととることに對して躊躇が表明されてきた。しかし、同じく「七日目」がクライマックスとして強調されている、

whn ʒpʒm bʒb^c (KTU 1.14: III: 14-15/Krt 118-119) cf. *mk. ʒpʒm bʒb^c*

の場合は、数詞 *bʒb^c* の直前の *ʒpʒm* “at sunrise” を、*whn* が強調していると考えられる。同じテキストの当該プロローグの *mʒb^ct hn. bʒlh* (20) の場合、*mʒb^ct* が他の <mqtl> 数詞と同じく topicalize されているので、「見よ！（彼らは）剣に倒れた」（*hn. bʒlh ttpl*）において、*bʒlh* が *hn* によって強調されていると考えることができるのではないだろうか。

ここで *bʒlh* が、他のいずれの語よりも強調されているのには、それなりの理由がある。「出生死」(*ktrm*)、「出生後の病死」(*zblnm*)、*rʒp* 神や *ym* 神の介入と比べて、人が「剣」(*ʒlh*: “spear” 又は “weapon”) に倒れるということは、人生において最も悲しむべき事柄である、ということが *hn* の付加によって強調されているのである。この点は、ダビデが主から7年間のききんか、3ヶ月敵の剣に追われることか、3日間の疫病か⁶⁸⁾、そのいずれかを選ぶように言われた時「人の手に陥る (לַפֶּסֶס) こと」(IIサムエル24: 11) = 「敵の剣が追い迫ること」(I歴代誌21: 12)こそが、「最も悲惨な経験」であることを表明していることから想像できる。

最近、dc Moor-Spronk, *UF* 14, p. 156 は、Dietrich-Loretz, *UF* 12, p. 204, no. 67 (“Unterweltsfluß”) とともに、*ʒlh* を “the deified river of the Nether World” と考えるが、その根拠は、18~21行の並行法の把え方にあるようである。彼らによると、*rʒp//ʒlm ym//ʒlh* という並行関係が成り立つというわけであるが、*mʒb^ct hn. bʒlh ttpl* は一行詩 (monocolon) であって、直前の二行詩 (18~19)//(19~20) とは直接関係してはいない。それゆえ、*rʒp//ʒlm ym* という神名の並行関係があるからといって、*ʒlh* を神名であると考えなければならない必然性はない。ここでは、*b* “by” (手段) という前置詞を伴ったある種の武器（「剣」か）が意味されていると考える方が、動詞 *npl* との関係からも適切である。

<21~23行>

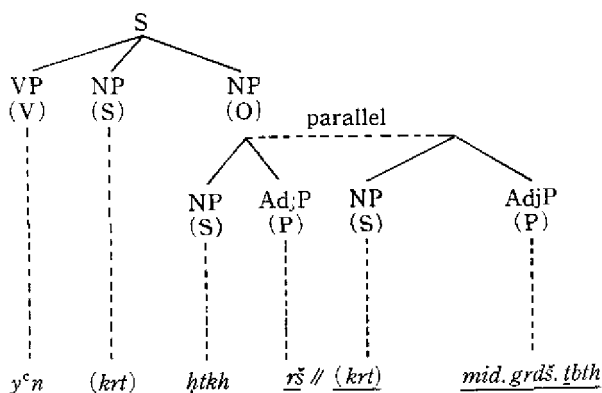
この三行 (21~22//22//23) は、10~11行にもとづいて拡大 (Expand) された拡大詩である。Loewenstamm の分析からも推論できるように⁶⁹⁾、一行目 (*y^cn. htkh krt*) の *krt* は動詞 *y^cn* の主語であり、その行自体は未完結である。それゆえ、この三行詩の基底にあると想定される二行詩は

$$\left\{ \begin{array}{l} y^c n (krt) htkh r\bar{s} \\ mid. grd \bar{s}. t\bar{b}th \end{array} \right.$$

となる。これをすでに見た10~11行

{*krt. ḥtkn. rš*
krt. grdš. mknt

と比べると *ḥtk* が *mknt* の synonymous variant⁶⁰⁾ で、共に *ḥtk* 「子孫」(10, 21, 22) と並行関係 (“chiasm”) にある。またここでも 10~11 行にあった対語 *rš//grdš* が見られ、*grdš* は *ḥbth* とコンストラクト・チェーンを構成する形容詞 (m. sg) の拘束形式 (bound form) であって、ここでは *mid* (副詞) を伴っている。11 行で *krt* がその述語 (形容詞句) の主語であったように、23 行の *mid. grdš. ḥbth* もその全体が述部 (形容詞句) であると見做すべきである。これらの要因を考慮して、三行詩の背後にある (underlying) と想定しうる二行詩の統語構造は次のようになるであろう。



上の分析に従うなら、Gordon の訳 (PLMU, 38)

“Kret sees his progeny

Sees his progeny ruined

Greatly despoiled of his dwelling”

は、修正 (改善) が必要となる。すなわち、

“Kret sees his progeny

Sees his progeny ruined

Himself greatly despoiled of his dwelling.”

ḥtk は、*mknt* の場合と同様に、単に物理的な住居のことを意味しているのではなくて、「王家、王朝」を意味していると考えべきである。

この三行詩は、10~11 行の二行詩を受けて、それを更に強くケレト王自身

の経験として (cf. *yfn*) その拡大詩の技巧によって表現しているのであるが、三行目の冒頭に10~11行にはなかった *mid* が加えられて王家の「完全な」滅亡がさらにクライマクティックに表現されているといえる。この“ascending” (上昇的) な漸層法的表現は、次の二行詩において、結論的に要約されている。

<24~25行>

wbtmhn は、強調の *w* と *b+tm* “totality”+*hn* “its” と分析されるが、KTU は異なる読みを提供している。*wbk*!hn. 3ph. yi*ibd*. いずれにしても、ここで王家の滅亡の「徹底さ」を結論的に述べていることが明らかである。*w//w, btm-hn// b. ph yrh, 3ph* “family”//*yrē* “heir” がそれぞれ対応関係にあり、ここでも二行詩のはじめの行の動詞が二行目で ellipsis になっていることがわかる。16~17行、18~20行の二行詩を参照。この動詞 *yitbd* と *itbd* (8) との関係はすでに見たとうりであるが、このプロローグのしめくくりの所で、当初の「滅び」を意味する *BD が再び現れることは注目に値する。8行目では「王家」(*bt. mlk*) が主語であったのに対して、ここでは *3ph//yrē* の対語が主語である。具体的に「世継ぎ」が絶えてしまったことが、ケレト王家の滅亡であることを、この二行が明確に示しているのである。ここで *3ph* も *yrē* も単数扱いされている点は動詞の形態 (*yqtl* 3.m.sg.) から明らか⁶¹⁾。おそらく「家族」//「世継ぎ」を集会的にとらえているからであろう。

* * *

以上のように、当該テキストには文献学的に難解な課題が多く残されている。そのために、従来、プロローグ全体の文学的構造の分析が十分になされては来なかったように思われる。以下に、現時点における筆者の理解をまとめて見たいと思う。

[I] 反復 (repetition)/対応 (correspondence)

文学的特徴に関する我々の最初の関心は、語・句・並行法などの反復 (repetition)⁶²⁾ についてである。語根 *BD は、上述のように *itbd* (8) と *yitbd* (24) に現われ、*huk* 「子孫」(10) は (21) (22) にて繰り返されている。並行対語である *r3//grd3* は10~11行と22~23行とに見られる。さらに *mknt* (11) と *tbt* (23) は、いわゆる“synonymous variants”であって、両者は「王家、王朝」を意味する。したがって、10~11行の二行詩は、variation を伴った repetition によって、拡大された三行詩として21~23行に出現する。このように「王家、王朝」と「子孫」の滅亡 (*r3//grd3*) が、並行法の反復によって強調的に述べられている。

「王(の)家」(*bt. mlk*) とは、宮殿のことではなくて、「家族、王家」を意味す

る。王家の滅亡は「一族の滅び」(*umt...c'rw*)であり(7~8行)、子のいない王にとって、それは王位の断絶を意味し王朝の終焉のことである。プロローグの結末部で、同じことが、「家族」(*šph*)//「世継ぎ」(*yrt*)の滅び(*BD)として表現されている(24~25行)。

本プロローグにおける数字の文学的用法は示差的である。8~9行の「7」//「8」という対語と、 $\frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8}$ という一連の分数とは、ともに*ŠB^cという「7」を意味する語根を含んでいる。その上、これらの数字がともにケレトの「息子たち」のことを意味しているという可能性がある。その場合、この7/8人の息子たちは、彼の正しくふさわしい妻(*att. šdq*)によって与えられた息子たちのことになり、彼らが次々と「全て」死んでしまう。そのことが $\frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} + \frac{1}{8} = 1$ という数字の文学的技法によって述べられていく。このように、初期の「7人の子」のいた理想的な「完全な」状態から、ケレトの妻がいなくなった後に彼らが次々と死に「完全に」⁶³⁾失われてしまうという絶望的な状態への移行が叙事詩の導入部において語られて、ケレト叙事詩の文学的効果を際立たせている。

〔II〕略述と詳述 (general-detailed description)⁶⁴⁾

上の反復/対応の文学的現象にもとづいて、プロローグ全体(1~25行)の構造を次のように分析することができるのではないだろうか。

A) 〔略述〕——「王家」(*bt mlk*)の滅亡(1~11行)

B) 〔詳述〕——妻がいなくなり(*tb^c*)、息子たち全員が死亡した結果、王家が滅亡(12~25行)。

この〔略述—詳述〕のパターンを支持する重要な文学的技巧の一つとして、A)の二行詩(10~11行)がB)で拡大された三行詩(21~23行)として現われる点に注目したい。このような拡大詩(Expanded colon)の〔詳述〕における使用の例は、アクハト叙事詩のプロローグの部分においても見られる。筆者の分析によれば、KTU 1.17/2 Aqht 1:1~5は〔略述〕であり、同テキストの6行目以降が〔詳述〕部分である⁶⁵⁾。

ケレト叙事詩の場合、〔略述〕部分で「7~8人の息子たち」のいた王家の滅亡が簡潔に述べられる。王家の滅亡とは、ケレトにとって自分の子孫(*hik*)が絶え、王朝が終焉することを意味する。その後、このモチーフの〔詳述〕が続く。予備的段階として、彼の「7~8人」の息子たちを産んだ「正しくふさわしい妻」が「いなくなる」。すなわち、妻の「死」《widowhood》が語られる。それから、本当の問題が倒来する——すなわち、全ての息子の死《loss of

children)。この「死」こそ、王にとって、妻の死あるいは自分自身の死よりも、もっと重大である。この息子たちの全滅は、24～25行で、王の全ての「世継ぎ」(yrt)の絶滅として表現されている。

この「子がない」(childlessness)という現実が、妻の「死」(widowhood)と息子の「死」(loss of children)という二段階の出来事によってもたらされたこと、本叙事詩が述べているのは決して故なしとは思われない。ウガリト社会において、「王家」の絶滅は「死」の神 Mot の働らきによるものと考えられる。本テクストで、*nhr*, *ršp*, *ym* という同じく破壊的な神々が出現し、「死」の神モートへの言及はないけれども、モートがケレト家の滅亡に関わっていなかったとは考えにくい。したがって、死の神モートが妻の死(widowhood)と息子の死(loss of children)とをもたらした究極の神であると考えるのがよいのではなかろうか。

この死の神のもっている機能は、KTU 1.23/UT 52 における神 *Mt-w-šr* がその両手にもっている *ulmn* (“widowhood”) と *tkl* (“loss of children”) の武器によって、象徴的に表わされている⁶⁶⁾。豊稔多産がその主要テーマである KTU 1.23/UT 52 では、*ulmn* と *tkl* の二つの武器を持つ *Mt-w-šr* 神の壊滅こそが、ウガリト社会に豊かさをもたらす「七人の良き神々 (*ilm n'mm*)」の誕生のための前提条件であったのである⁶⁷⁾。

人間社会の経験として、やもめが息子を全て失うということは、最も悲惨な事柄である。たとえば、旧約聖書はその事について、ルツ記、イザヤ書47：8—9、ホセア書9：12、エレミヤ書15：7～8、18：21等で述べている。王位の継承、存続のためには、「世継ぎ」である子を失うこと (loss of children) こそ、夫または妻を失うこと (widowhood) ことよりも、重大な結果を来す。後者は、予備的又は二次的事態であって、本叙事詩のように、その後に起きる息子たち(「世継ぎ」)の全滅こそが、「王家」の断絶をもたらす直接の原因となるのである。

これらの諸点から、ケレト叙事詩のプロローグの所に、「子がない」“childlessness”というモチーフ——widowhood とその後に起った loss of children の結果としての——を認めることは、決して見当はずれでないばかりか、蓋然性が非常に高い推論ではないだろうか。したがって、ここに、七人の妻たちの死のモチーフを見出そうとする〔B〕の立場は、文献学的難点とともに、文学的側面からも否定されるべきである。

- *⁰ 本論文は *Monarchies and Socio-Religious Tradition in the Ancient Near East* (Bulletin of the Middle Eastern Culture Center in Japan Vol. I), Wiesbaden: Otto Harrassowitz, (in print) 所収の拙著, “The Problem of Childlessness in the Royal Epic of Ugarit—An Analysis of KRT [KTU 1.14: I]: 1-25—” に基づいて, それを文献学的・言語学的議論を補足しつつ改訂したものである。なお, 本稿における略号は, *Ugarit Forschungen* 11 (1979) のそれに従う。また, 本誌 1 (1976), pp. 105f; 6 (1981), pp. 137f. をも参照。
- ¹ H. L. Ginsberg, *LKK* (1946), pp. 14 & 33; C. H. Gordon, *UL* (1949), p. 67 & *PLMU* (1977), p. 37; G. R. Driver, *CML* (1956), p. 29 & “Ugaritic Problems,” in S. Segert (ed.), *Studia Semitica: Ioanni Bakoš Dedicata* (Bratislava, 1965), pp. 95f.; J. Gray, *KRT*² [= *The Krt Text in the Literature of Ras Shamra* (Leiden, 1964)], pp. 11 & 32f. & *LC*² (1965), pp. 132ff.; F. C. Fensham, “Remarks on Certain Difficult Passages in Keret,” *JNSL* 1 (1971), pp. 18-21; M. Dietrich-O. Loretz, “Der Prolog des Krt-Epos (CTA 14 I 1-35),” in H. Gese & H. P. Rüger (eds.), *Wort und Geschichte: Festschrift für Karl Elliger zum 70. Geburtstag (AOAT 18)* (Neukirchen-Vluyn, 1973), pp. 32-34, & “Das Porträt einer Königin in KTU 1.14 I 12-15,” *UF* 12 (1980), pp. 202-4; A. Herdner in A. Caquot et al., *TO* (1974), pp. 505f.; M. D. Coogan, *Stories from Ancient Canaan* (Philadelphia, 1978), p. 58; D. Kinet, *Ugarit: Geschichte und Kultur einer Stadt in der Umwelt des Alten Testaments* (Stuttgart, 1981), pp. 112f.
- ² U. Cassuto, “The Seven Wives of King Keret,” *BASOR* 119 (1950), pp. 18-20; A. van Selms, *MFUL* (1954), p. 97, & “The Root *k-t-r* and its Derivatives in Ugaritic Literature,” *UF* 11 (1979), p. 742; J. Aistleitner, *MKT*² [= *Die Mythologischen und Kultischen Texte aus Ras Shamra* (Budapest, 1964)], pp. 87ff.; H. Sauren-G. Kestemont, “Keret, roi de Hūbur,” *UF* 3 (1971), pp. 194ff.; B. Margalit, “Studia Ugaritica II: Studies in *Krt* and *Aqht*,” *UF* 8 (1976), pp. 137-145; J. C. L. Gibson, *CML*² (1978), pp. 20 & 82; J. C. de Moor, “Contributions to the Ugaritic Lexicon,” *UF* 11 (1979), pp. 643f.; P. C. Craigie, *Ugarit and the Old Testament* (Grand Rapids, 1983), p. 56.
- ³ Dennis Pardee, “The New Canaanite Myths and Legends,” *BO* 37 (1980), p. 284.
- ⁴ これは母音の語中添加 (epenthesis 又は anaptyxis) であって, ヘブル語的 segolization の現象ではない。cf. *malk->málik>mélek. 本稿では, 「キルト」(Kirtu) や「キリト」(Kirit-) ではなく, 一応, 伝統的な読みに従って, 便宜上「ケルト」とカタカナ表記することにしておく。なお理論的には *Kartu や *Kurtu も可能である (cf. *TO*, p. 484, no. 1) ので, 「カルト」「カリト」や「クルト」「クリト」も表記上許される。
- ⁵ J. C. de Moor-K. Spronk, “Problematical Passages in the Legend of Kirtu (I),” *UF* 14 (1982), p. 153ff. なお Coogan は Albright に従って Kirta と読んでいる。
- ⁶ 松田伊作「クリト叙事詩」『文学研究』66 (1969), p. 110; de Moor-Spronk (1982), p. 153, no. 3 参照。
- ⁷ 「海」と「川」の並行対語 (parallel word pair) については, *RSP* I (1972), II 233 (p. 203) を参照。
- ⁸ Driver, *CML*, pp. 2 & 5; Gray, *KRT*², p. 31; Stan Rummel, “Narrative Structures

in the Ugaritic Texts," in *RSP* 3 (1981), p. 303, no. 10.

- 9) *CAD* (B), pp. 293ff. 参照。
- 10) L. Badre *et al.*, "Notes Ougaritiques I: Keret," *Syria* 53 (1976), p. 96; G. del Olmo Lete, *Mitos y Leyendas de Canaan*, Madrid, 1981, p. 289.
- 11) cf. šapûyât-(fem. pass. part. pl.) Gordon, *UT* 9.24 参照。
- 12) 「家」(*bt*) は, *RW とともにハバクク書 3 : 13に, *BD とともにⅡ列王記 9 : 8 に表われる。cf. Badre *et al. Syria* 53, pp. 96f.; A. Herdner, *TO*, p. 503, no. d.
- 13) Douglas K. Stuart, *Studies in Early Hebrew Meter*, Missoula, 1976, p. 59, no. 6 は *itbd* を /'itabida/ または /'itabida/(<*'i'tabida/) と発音 (vocalize) している。
- 14) ヘブル語とウガリト語における他の例は C. H. Gordon, "He is Who He is," *Berytus* 23 (1974), pp. 27-28 を参照。
- 15) なお母音と母音の連声現象については, 拙著「ウガリト語研究 (2)——ウガリト語における連声 (Sandhi) について——」『文藝言語研究 (言語篇)』7 (1982), pp. 111-126 を参照のこと。
- 16) Pardee, *BO* 37, p. 284 は, Gibson, *CML*² の書評の中で自説を変更して, Gibson の立場を "probably right" と言って支持している。
- 17) Francis I. Andersen, "Israelite Kinship Terminology and Social Structure," *The Bible Translator* 20 (1969), p. 38.
- 18) Gray, *KRT*², p. 30.
- 19) Gibson, *CML*², p. 82, no. 2.
- 20) Herdner, *TO*, p. 504 も *grš* を名詞 ("une ruine") ととっている。
- 21) de Moor-Spronk に従えば, 当該の三行詩は
- | | | |
|---|--------------------------|---|
| { | <i>y'n. ḥtkh krt.</i> | 3 |
| | <i>y'n. ḥtkh rš mid.</i> | 4 |
| | <i>grš. tbt</i> | 2 |
- と分析されることになり, *rš mid* における *rš* が「動詞が形容詞か」であると主張される。
- 22) 柴山栄「ケレト」『古代オリエント集』筑摩書房, 1978, p. 329.
- 23) J. Aistleitner, *MKT*, p. 89.
- 24) たとえば, Coogan, *Stories* ..., p. 52 は, "Kirta's situation recalls that of Job" と言っている。同様に, M. H. Lichtenstein, *Episodic Structure in the Ugaritic Keret Legend*, Ann Arbor, 1979, pp. 423ff. を参照。
- 25) Cf. Herdner, *TO*, p. 485.
- 26) de Moor-Spronk, *UF* 14, p. 155, no. 19 参照。
- 27) Gordon, *UT* 19.2147. なお A. Heidel はギルガメシュ叙事詩の *aššāt šimātīm* "the lawful spouses" (Gilg. P. iv 32) を "(cum) uxoribus destinatis" と説明している。Cf. Heidel, *The Gilgamesh Epic and Old Testament Parallels*. Chicago, 1949, p. 30. また, *CAD* (A/2), p. 465 をも参照。
- 27a) 「7人の子供の母」のモチーフについては, 拙著 *The Ugaritic Drama of the Good Gods*, Ann Arbor, 1973, pp. 192-194 を参照のこと。
- 28) 但し, Gray は (14)/(15) が一人の妻のことに言及していると考え, 全体としてケレトの子の死がモチーフになっていると考えている。Cf. *KRT*², pp. 11 & 32.
- 29) de Moor, *UF* 11, p. 644.

- 80) B. Margalit, "Studia Ugaritica II: 'Studies in *Krt* and *Aqht*,'" *UF* 8 (1976), pp. 137ff.
- 81) 12行の *att. šdq* を最初の妻とする Aistleitner, *MKT*, p. 89 は, 15行の冒頭を *itr um* と読み換える。
- 82) この点に関しては, 後述。
- 83) 「一行詩」("monocolon") という用語については, S. Segert, "Parallelism in Ugaritic Poetry", *JAOS* 103 (1983), p. 297 を参照。なおヘブル詩における一行詩の例としては, 詩篇23: 1, 139: 1b等が挙げられるだろう。
- 84) 筆者の分析によれば, 10~25行には, 次のような symmetrical pattern があるようである。(10-11) 二行詩
(12-14) 三行詩
(15) 一行詩
(16-17) 二行詩
(18-20a) 二行詩
(20b-21a) 一行詩
(21b-23) 三行詩
(24-25) 二行詩
- 85) 同様の例として, *att. itrḥ* (KTU 1.23/UT 52: 64) "O wives I have wed!" (拙著 *The Ugaritic Drama*, p. 90 を参照), *att tqḥ* (KTU. 1.15/UT 128: II: 21-22) "The wife thou takest (. . . will bear thee seven sons)" (cf. Gordon, *PLMU*, pp. 47f.) 等がある。
- 86) 3 : 2 : 3 の韻律パターンをとり, それぞれ第一行と第三行の末尾に動詞 (*c/c'*) が来るといふ, 類似例は, *Atra-Ḥasis* I: 64-66,
- | | | |
|---|-----------------------------------|------------|
| { | <i>išatam nepi šišunu iddāma</i> | (a-b-c) |
| | <i>marrišunu išatam</i> | (b'-a') |
| | <i>šupšikkišunu ḡirra ittakšu</i> | (b"-a"-c") |
- にも見られる。Cf. W. G. Lambert & A. R. Millard, *Atra-Ḥasis: The Babylonian Story of the Flood*, Oxford, 1969, p. 46.
- 87) ギルガメシュ叙事詩の洪水物語の英雄 Utnapištim の妻は, *sinništu* "woman" (*Gilg.* XI: 191, 194) とか *marḥitu* "spouse" (XI: 202, 205, 209, 258) と呼ばれている。また古バビロニア語 (OB) のアトラ・ハシース叙事詩 (注36を参照) I: 276, 300 では, *ašiatu* が英雄の「妻」を意味する語として用いられている。Cf. Jeffrey H. Tigay, *The Evolution of the Gilgamesh Epic*, Philadelphia, 1982, p. 232, no. 50. これらの *ašiatu* = *sinništu* "woman", *marḥitu* "spouse" が, ケレト叙事詩の当該の語, *att. mtrḥt* にそれぞれ, 意味においてだけでなく語源的にも対応している (*NT, *RHW) ことに注目せよ。ウガリト語の *trḥ* は, おそらく, W. F. Albright, *BASOR* 71 (1938), p. 38 が指摘するように, *RHW にもとづく動詞 (cf. アッカド語 *reḥū*) から派生した名詞 (cf. アッカド語 *terḥatu*) よりの "secondary denominative" 動詞であると説明できるだろう。拙著 *The Ugaritic Drama*, pp. 90 & 157, no. 449 を参照。
- 88) A. Herdner, "Nouveaux Textes Alphabetiques de Ras Shamra—XXIV* Campagne, 1961," *Ug* VII (1978), pp. 45-49. Cf. Badre *et al.*, *Syria* 53 (1976), p. 98, no. 3.

- ³⁹⁾ *ib* 「去った」「departed」が文字通りの意味なのか、「死んだ」を意味する婉曲語法なのかは、本論文においては本質的な問題ではない。(この点に関しては、Cyrus H. Gordon の最新の *PLMU*, p. 35 を参照せよ。)妻が「いなくなった」後の「息子たちの死滅」が問題となっているのであるから。
- ⁴⁰⁾ この〈A not B〉パターンを認識することは、詩文の解釈にとって特に重要である。たとえば、ハバク書 2:3~5 には、このパターンに従った動詞の対語が、筆者の分析によれば、5組ある。すなわち、**יָבֵן וְלֹא יִפָּחַ** (2:3a);
לֹא יִאָחַר יָבֵן (2:3b); **עֲפָלָה לֹא יִשְׁרָה** (2:4a);
יְנֹה וְלֹא יִנְוָה (2:5a); **נִפְשׁוּ וְלֹא יִשְׁבְּעוּ** (2:5b)
- ⁴¹⁾ これは最近の Parunak (1983) の “Transitional Techniques” によって説明されるかもしれない。彼によれば、この Techniques は, “surface patterns of repetition or similarity that join successive textual units together.” と定義される。当該のテキストでは、二つの詩行 (同義的並行法) —textual units—
 { (12) *att. šdqh. lypq* <A>
 { (14) *att. trh. wtb’t*
 を連結 (link) するために、〈A〉部分の *šdq* との並行対語である *yšr* (a) と、〈B〉部分の *att. trh* の同義語である *mtrht* (b) が <A//ba//B> というパターン (Parunak の “inverted hinge”) で用いられている。この ba, すなわち *mtrht. yšr* が、〈A〉と〈B〉を連結する hinge の働きをしているわけである。このように、Parunak が談話 (Discourse) に対して行った論述は、並行法 (parallelism) の場合にも、原則的に当てはまるといえるのではないか。Cf. H. van Dyke Parunak, “Transitional Techniques in the Bible,” *JBL* 102 (1983), pp. 525-548.
- ⁴²⁾ たとえば, Ginsberg, *LKK*, p. 33; Dietrich-Loretz, *AOAT* 18, p. 34 他。
- ⁴³⁾ Fensham, *JNSL* 1, p. 18.
- ⁴⁴⁾ Stuart, *Studies in Early Hebrew Meter*, p. 54.
- ⁴⁵⁾ Cf. Gray, *KRT*², p. 32.
- ⁴⁶⁾ 様々な立場については, G. del Olmo Lete, “Notes on Ugaritic Semantics I,” *UF* 7 (1975), p. 90, no. 3 を見よ。
- ⁴⁷⁾ Margalit, *UF* 8, pp. 137ff. は, [A] を “progenists”, [B] を “feminists”, (i) を “fractionist” と呼ぶ。
- ⁴⁸⁾ de Moor, *UF* 11, p. 644; Margalit, *UF* 8, pp. 138f. 参照。
- ⁴⁹⁾ Gray, *KRT*², p. 32.
- ⁵⁰⁾ Driver, in *Studia Semitica*, pp. 95f.
- ⁵¹⁾ 詳しくは後述。
- ⁵²⁾ 意味は「2 シェケル $\frac{1}{4}$ で」。 *qlm* が双数であることと, *rb’t* が基数 (cf. *arb’*) ではありえないことに注意。
- ⁵³⁾ Olmo Lete, *UF* 7, p. 90 参照。
- ⁵⁴⁾ Ginsberg, *ANET*², p. 143, no. 3.
- ⁵⁵⁾ Gordon, *UT*, p. 50, no. 1.
- ⁵⁶⁾ Joshua Finkel, “A Mathematical Conundrum in the Ugaritic Keret Poem,” *HUCA* 26 (1955), pp. 109-149 を参照。

- 57) いわゆる《AXB》パターンの文学的現象。Xが前置詞でありうるものが、この例によって明らかである。拙著“Literary Insertion (AXB Pattern) in Biblical Hebrew,” *VT* 33 (1983), pp. 468-482 を見よ。
- 58) Rummel, *RSP* 3, p. 304, no. 12 参照。
- 59) Cf. S. E. Loewenstamm, “The Expanded Colon in Ugaritic and Biblical Verse,” *JSS* 14 (1969), pp. 176-196; “The Expanded Colon, Reconsidered,” *UF* 7 (1975), pp. 261-264; etc.
- 60) S. Talmon, “Synonymous Readings in the Textual Traditions of the Old Testament,” *Scripta Hierosolymitana* 8 (1961), pp. 335-383.
- 61) yqtl. 3. m. pl. は、すでに見たように《qtldn》形をとるからである。
- 62) Repetition に関して、R. Alter, *Art of Biblical Narrative*, 1981 を参照せよ。
- 63) ケレトの7~8人の子らの「完全な」滅亡は、数学的にも
 $7 \times (\frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{6} + \frac{1}{8} + \frac{1}{10}) \div 7 \times 1.09 = 7.63$
 によって示されている。7.63は、7と8の間の数字！
- 64) オリエントの他の文献における諸例は、U. Cassuto, *From Adam to Noah*, Jerusalem, 1944, 1961, pp. 89ff (創世記1章-2章); K. A. キッチン『古代オリエントと旧約聖書』東京, 1979, pp. 153f. (カルナク詩的碑文, ゲベル・バルカル碑文); I. M. Kikawada, *Iraq* 45 (1983), pp. 43-45 (アトラ・ハシース叙事詩) 等を見よ。その他、日本語の談話構造における<略叙-細叙>の現象についての最近の論述として、林四郎「文の構話姿勢」『文藝言語研究(言語篇)』6 (1981), pp. 50ff. を参照。
- 65) KTU 1.17/2 Aqht: I: 2-3

$$\begin{cases} uzr. ilm. ylh\dot{m} \\ [uzr. y\dot{s}qy.] bn. qd\dot{s} \end{cases}$$
 および I: 3-5

$$\begin{cases} yd.[\dot{s}th. y'l.]wy\dot{s}kb. \\ yd.[mizrth.] p\dot{y}ln \end{cases}$$
 の二行詩は、それぞれ、三行詩に拡大されて

$$\begin{cases} uzr. ilm. dn\dot{il}. \\ uzr. ilm. ylh\dot{m}. \\ uzr. y\dot{s}qy. bn. qd\dot{s} (6-8, 9-11, 11-13) \end{cases}$$
 と

$$\begin{cases} yd. \dot{s}th.[dn]il. \\ yd. \dot{s}th. y'l. wy\dot{s}kb \\ [yd.]mizrth. p\dot{y}ln. (13-15) \end{cases}$$
 という Expanded Cola を形成している点に注目せよ。従って、I: 1-5 (二つの二行詩) を [略述], I: 6-15 (四つの三行詩) を [詳述] と分析することが可能である。このように、Expanded colon を詳述部に位置づけることが適切であるから、ケレト叙事詩の場合も、21~23行を詳述部に、それゆえ10~11行を略述部に位置づけることができるのではないだろうか。なお、Fensham, *JANSL* 1, pp. 21-22 は、KTU 1.14: I/Krt: 10-25 全体を“inclusive poem”ととっているが、その場合、24~25行が *inclusio* の外にはみ出してしまおうことになる。
- 66) 拙著 “‘A Ugaritic God, *Mt-w-Šr*, and his ‘Two Weapons’ (UT 52: 8-11),” *UF* 6

(1974), pp. 407-413 を参照。

- *7) KTU 1.23/UT 52 に関しては、拙著 *The Ugaritic Drama*, 1973 を参照。